

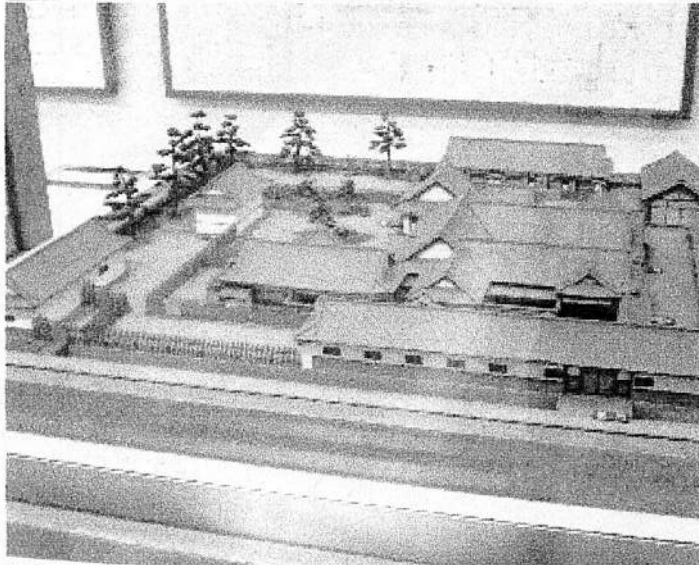
横高新聞

号外

EXPRESS

横須賀高校新聞部

和田冴織 鈴木靖子
戸田寛人 村山敦哉



浦賀をルポする

江戸の海を守った浦賀奉行所 現在は石垣と石橋を残すのみ

江戸時代、横須賀東部の旧浦賀村にあった浦賀奉行所の歴史を伝える郷土資料センターと奉行所跡地を歩いてみた。

徳川家康が江戸幕府を開いた際、江戸は一気に一大消費地となった。その江戸入りする諸船を取り締まる海の関所として下田に設けられた船改めが、徳川吉宗の享保の改革によって、より江戸に近く、天然の良港

である浦賀に移されたのが、浦賀奉行所の始まりだ。その規模は、長さ20町余り、幅2町余り、湊口の深さは5丈余りとかかなり大きい。五大カ船11隻、小舟50隻、伝馬船150隻が常に繋がれて、運輸の便を図った。入港する船は毎月300〜400艘に上るとされ、非常に栄えていた(町は約109m、丈は約3m)。

郷土資料センターにある浦賀奉行所のジオラマ

当初は西よりも栄えていた東浦賀に移された予定だったが、海岸に軒を連ねる干鯛問屋が強固に反対したため、享保6年西浦賀に置かれた。

浦賀奉行所のもっとも重要な任務は江戸に行く船の積載貨物を廻船問屋とともに点検し、通行許可の切手を付与することだ。また、現代で言う、警察署、消防署、裁判所、市役所といった役割も果た



浦賀奉行所の石垣の名残

時が流れて文化年間にしていた。

浦賀船渠の変遷

住重撤退の活気がなくなるの友

ペリー来航以降の浦賀は造船の町として栄えることになる。

造船都市浦賀としての第一歩は幕府の浦賀造船所。ペリー来航で対外的な危機感を抱いた幕府は与力の中島三郎助を造船主任に任命し、浦賀造船所で、日本初の洋式軍艦『鳳凰丸』を造らせた。

横須賀に横須賀造船所が造られ、浦賀造船所は1876年に閉鎖されるものの、1897年、浦賀船渠が設立され、船舶の修理などに利用された。

り、日本へ外国船が来るようになると、他藩と協力して江戸湾を警備する職務が新たに追加され、黒船来航以来は外国との交渉の最前線として重要度が増し、長崎奉行所と同格に重んじられるようになった。

江戸幕府が滅び、浦賀奉行所は148年の歴史に幕を下ろし、現在は石垣と石橋の一部を残すのみだ。

1969年、変遷を経て、浦賀船渠は住友重機械工業(以下住重)と合併し、2003年に閉鎖されるまで多くの大型船舶を世に生み出していった。

住重が閉鎖されたことによって工場で働いていた労働者は徐々に市外へ引っ越すようになり、横須賀市の人口は一年間で43万人から42万8千人に減ってしまった。20年前、近くの大学に通っていた人は「病院や店が減ってしまい、活気がなくなかった」とその変化を悲しむ。

論説 中島三郎助の生き様に学ぶ 行動する人が新しい時代を開拓する

中島三郎助という人物を知っているだろうか。中島三郎助は1821年に浦賀奉行所の与力の家柄に生まれ、長じてのちは自身も浦賀奉行所の与力となる。砲術、造船学や航海術などに長け、木鶏の雅号で和歌や俳諧も嗜んで、多くの作品を残した。まさに文武両道を絵に描いたような人物であった。また彼は初めて黒船に乗り込んだ日本人でもある。

1853年当時、浦賀奉行所の応接掛に任命されていた三郎助は、通訳の堀達之介と共に番船で黒船の一隻に接近し、退去勧告をするが、アメリカ側は相応な身分の役人としか對話しないと主張して譲らないため、独断で『副奉行』と称して黒船に乗艦し、ペリーの副官と対談した。彼は技術者として本物の異国船に興味津々で、内部を隅々まで調べて乗組員を質問攻めにした。職務とはいえ豪胆なことだ。

大船建造禁止令の時代で大型船の建設を主張するなど、先見の明があった三郎助は、将来洋式船を作ることになることを予見していたのだろう。黒船来航以前、浦賀に就航した

軍港としての側面を持つ横須賀港 砕氷艦のしらせ 一般公開

8月3日(土)に、海上自衛隊横須賀地方総監部で、海上自衛隊横須賀地方隊による「ヨコスカサマーフェスタ2013」が開催された。艦艇の一般公開やヘリコプターの展示など様々なイベントが催され、来場者数は午後2時の時点で1万2千人に達した。

砕氷艦の公開では、「しらせ」が公開された。「しらせ」は、海上自衛隊に所属し、南極地域の観測協力を行う日本唯一の砕氷艦であり、南極への多くの物資及び観測隊員の輸送を任務とするほか、観測支援などを行っている。

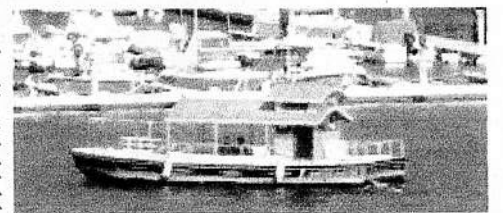
エンジンで発電機を回してつくった電気の電圧や周波数をインバーターで変え、

モーターの回転を目標の速さにコントロールする。モーターが回ると、プロペラが回転して、それにより船が進む。最大出力は約2万キロワットで、家5万軒分の消費電力と等しい。

船内には多くの船室があり、複雑な構造だったが、係員をしていた隊員は「船員はその部屋のある場所や部屋への行き方までしっかりと把握している」と平然としていた。

全国的にも珍しい海上の市道

ポンポン船



航行するポンポン船

東浦賀と西浦賀を結ぶ浦賀海道は全

国的にも珍しい、海を渡る市道だ。運航する愛宕丸は地元ではポンポン船の愛称で親しまれている。233mの航路を3分ばかりで渡りきる。この海道は観光のために作られた訳ではなく、古くから地元民の手で整備され、生活に根付いていた歴史ある道なのだ。乗った感想としては予想以上に速く、吹き抜ける潮風が爽快だった。

編集後記

今回は初の号外になります。在りし日の横須賀は軍港都市や奉行所の町として大いに栄えていたのです。時代が下って当時の面影はもうなくなりつつあって一抹の寂しさを覚えます。しかし調べれば調べるほど横須賀という街の魅力とその重要性を再確認し、繁栄していた歴史を下敷きにして横須賀がもつとずっと好きになりました。テーマから逸脱した感もありませんが、今までで一番楽しく、収穫の多い新聞作りでした。

(和田)